

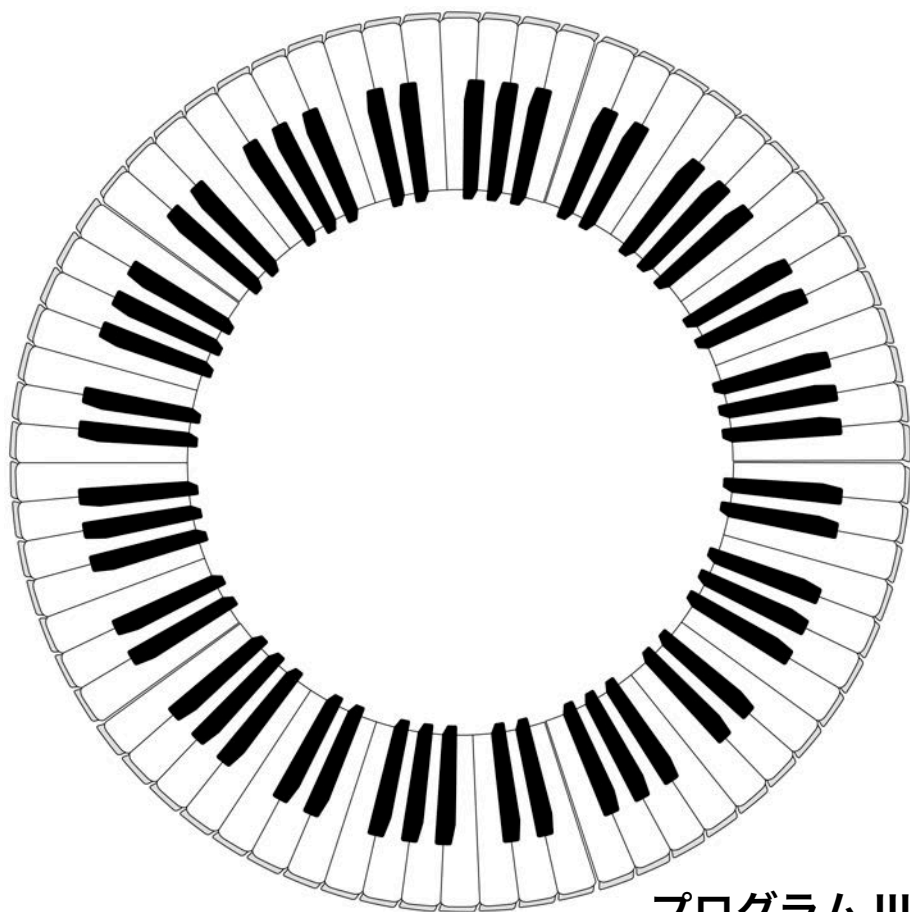
第6回 両国アートフェスティバル 2020

芸術監督●夏田昌和

Ryogoku Art Festival 2020

Program III

Director: Masakazu Natsuda



プログラム III

2021年3月20日(土)、21日(日)

会場●両国門天ホール

20, 21 March 2021
at Ryogoku Monten Hall

公演に寄せて

「我々はどこからきたのか 我々は何物か 我々はどこへ行くのか」……ゴーギャンの絵画タイトルとして知られるこの言葉は、芸術の創造と継承に携わるものにとって根源的な問いであり続けます。今年度の第6回両国アートフェスティバル、プログラムIでは「我々はどこからきたのか」を確認するために、ルネッサンス時代から現代に至る約5世紀の音楽史を、芸術監督の解説と4人のピアニストによる演奏で一気に概観します。一般には異質のものと捉えられることも多い古楽とクラシック、現代音楽が、遙かな時と世代を超えて一本の線で繋がっていることを一公演のうちに実体験出来る催しです。続くプログラムIIでは、西洋音楽とインドの伝統音楽とを対比させることにより「我々は何物か」について互いに思索を深めていきます。数多くの文化や民族、言語、宗教、思想、ジェンダーが複雑に混じり合う現代世界において、他者と向きあい対話することは自らの存在や特性を客観的に見つめ把握するために最適の方法ではないでしょうか。そして最後のプログラムIIIでは、4分音調律ピアノによる音世界の中に「我々はどこへ行くのか」を探ります。それは耳慣れた12平均律を超える微分音の響きと未体験の音楽言語を、今を生きる作曲家達がそれぞれの方法で模索する試みです。

3つのプログラムは、音楽史の歩みや微分音というキーワードを介して、それぞれ次へと繋がっていくように配されています。是非一続きのものとして3公演をお楽しみ頂ければ幸いです。

第6回 両国アートフェスティバル 2020

芸術監督 夏田昌和

Message from the Artistic Director

"Where do we come from? What are we? Where are we going?" These questions, known as the title of P. Gauguin's masterpiece, have been fundamental for those who engage in creation and inheritance of art. In Program I of the 6th Ryogoku Art Festival, we provide an overview of five centuries of music history from the Renaissance until today by commentary from the Artistic Director and performances by four pianists. This concert offers a live experience for audience to realize that early music, classical music and contemporary classical music, usually regarded as completely different, are actually connected beyond time and generations. In Program II, we speculate about "what we are" by contrasting Western and Indian traditional music. Facing others and conversing with them might be the best way to look into and figure out our own existence and nature in the contemporary world, where different cultures, ethnicities, languages, religions, thoughts and genders intermingle. In Program III, we explore "where we are going" in the sound world of quarter-tone piano. Composers living today try to look for their own ways to explore the sonority of microtones, which surpasses conventional twelve-tone equal temperament as well as unheard-of musical language. The three concerts are meant to connect one after another through keywords, such as "strides of music history" and "microtone." I hope that you will enjoy these three concerts as a sequence.

Masakazu Natsuda

Artistic Director of Ryogoku Art Festival 2020

III

我々はどこへ行くのか

4分音ピアノで描く音楽の未来

日時◎2021年3月20日(土)、21日(日) 16:00 開演

1/4音違いに調律された2台のピアノを用いて、微分音程に満ちた響きの中に未来の音楽の可能性を探求します。この分野の先駆者であるアメリカのアイヴズとロシアのヴィシネグラツキ、この演奏会のために作曲された委嘱作品3曲と、公募によって選ばれた若手作曲家による3作品を演奏。世に演奏会は多々あれども、滅多に聴くことが出来ない不思議な音響世界を体験して頂きます。

演奏◎及川夕美・大須賀かおり (ピアノ)

プログラム構成・司会◎夏田昌和

Program

1. チャールズ・アイヴズ / Charles Ives
《3つの4分音作品 / Three Quarter-Tone Pieces》 (1923-24)
 2. イヴァン・ヴィシネグラツキ / Ivan Wyschnegradsky
《統合 / Intégrations Op.49》 (1967)
 3. 山根明季子 / Akiko Yamane
《目グリッチアニメイテッドアイ / eye glitch animated eye》
(2021, 両国アートフェスティバル 2020 委嘱作品・初演)
 4. 冨田正之介 / Masanosuke Tomita
《一つ、またひとつ / One after another》 (2020, 公募入選作品・初演)
- *** 休憩 15分 ***
5. 渡部瑞基 / Mizuki Watanabe
《コントラプункト / Kontrapunkt》 (2020, 公募入選作品・初演)

6. 夏田昌和 / Masakazu Natsuda

《4分音を伴う3和音のためのエチュード / Étude pour les accords de trois notes avec quart de ton》

(2021, 両国アートフェスティバル 2020 委嘱作品・初演)

7. 渋谷由香 / Yuka Shibuya

《ファウンド・モーメント / Found Moment》

(2021, 両国アートフェスティバル 2020 委嘱作品・初演)

8. キムヨハン / Yohan Kim

《空間と空間の間の空間 / A room between the rooms》 (2020, 公募入選作品・初演)

解説

1. チャールズ・アイヴズ / Charles Ives

《3つの4分音作品 / Three Quarter-Tone Pieces》 (1923-24)

アイヴズ (1874-1954) は19世紀末から20世紀前半にかけてのアメリカで、保険業の実業家として社会的な成功を収める一方、複調や無調、複雑なポリリズム、クラスター、既存の音楽素材の引用やコラージュといった先鋭的な手法を、より伝統的な音楽語法に大胆に取り入れ、ユニークな音楽作品を書いたことで知られる作曲家。

1923年から24年にかけて書かれた《3つの4分音作品》は、ハーバやヴィシネグラツキと並び、4分音を全面的に用いた音楽としては極めて初期に位置する草分け的な作品である。緩-急-緩というアイヴズ好みの3楽章より成るが、両端の楽章は元々、2重の鍵盤を有する4分音ピアノという楽器を用いて一人で演奏するために書かれた。その後、より利便性の高い4分音違いで調律された2台ピアノのために書き換えられ、更に中間の楽章が加えられて現在の形に整えられた。

第1楽章のLargo (幅広く) では、各パートは概ね全音階的な筆致で書かれており、穏やかさを基調とする美しい楽章となっている。4分音は、①和声語法の拡張 (複雑な非整数倍音をもつ鐘のような響き)、②旋律上の経過音や倚音として、③僅かに高くあるいは低くフレーズを返すエコー効果、④メロディと伴奏を4分音ずらすことによる独特の声音、⑤刺繍和音群による音の揺れ、といった多彩な用いられ方をしている。

第2楽章の Allegro（生き生きと速く）は、一転して賑やかなアイヴズが得意とするラグタイム。始めから2人の奏者と2台のピアノのために書かれただけあって、調律の異なる2者との頻繁な掛け合いが楽しい。所々で半音階が互い違いに奏されて4分音スケールが生み出される他、クライマックス付近では4分割と3分割の重ね合わせによるポリリズムも見られる。

第3楽章は Adagio のコラールで、感情の起伏の大きい非常にエモーショナルな音楽である。2台のピアノはほぼ常に一体となって4分音を含むハーモニーやメロディを形成する。曲の半ばで“定旋律”として比較的是っきりと聴かれる賛美歌風のメロディ（～筆者の耳にはイギリス国歌「God Save the Queen」の冒頭に聞える～）が、最後の Coda 部ではまず4分音階組織に圧縮されて歌われ、次いで半音階に、最後には全音階的な本来の姿に戻ってくるのも、味わい深い仕掛けと言えよう。（夏田昌和）

2. イヴァン・ヴィシネグラツキ / Ivan Wyschnegradsky

《統合 / *Intégrations Op.49*》(1967)

ヴィシネグラツキ（1893-1979）はロシアに生まれ、革命後の混乱を逃れて1920年にフランスへと亡命した作曲家。早くも1917年には微分音を用いた作曲を始め、亡命後の22年にはベルリンを訪れてハーバードドイツの微分音主義の作曲家たちと親交を結んだ。以来長年にわたり、4分音や6分音を体系的に用いた微分音音楽のパイオニアとして数多くの作品を残している。

1967年に作曲された《統合》は2つの曲より成っているが、作曲者によれば両曲とも“短5度”（完全5度-1/4音=13/4音）の間隔で24の音高を一巡するサークル状の音高組織（所謂5度圏の図の拡張版と言えよう）に基づいて作曲されている。いかにも1960年代の作品らしく、「旋律と伴奏、モチーフの模倣、主題の提示や展開」といったクラシック音楽の伝統的な音楽構造や構成法、表現と形式のひな形を一切廃し、音高と音価による抽象的な構造体をシステムティックに織り上げるといふ、知的で急進的な創作姿勢が顕著である。

《統合Ⅰ》は、そうしたサークル状の非オクターヴ・システムを「ハーモニックに」用いているとのことで、16分音符=132という非常に遅いテンポの中で、2台のピアノが終始複雑な分割の連符で縫うように奏していく。後半になるにつれて次第に和音の厚みが増していくが、その響きは確かに13/4音や、その近似としての完全5度と減5度が交替する堆積和音によって得られている。

《統合Ⅱ》では、《Ⅰ》とは反対に前述の13/4音サークル・システムは「ポリフォニー的に」扱われる。対照的な2つの声部：中～低音域において単音で線的に紡がれて行く声部Aと、中～高音域においてクラスター（音の塊）の“面”が連続する声部Bが、互いに独立した動きで進んでいく。AとBは13/4音サークルを逆廻りで辿っているとのことである。（夏田昌和）

3. 山根明季子 / Akiko Yamane

《目グリッチアニメイテッドアイ / *eye glitch animated eye*》

(2021、両国アートフェスティバル2020委嘱作品・初演)

ビビッドな輪郭の線でアニメキャラクターの様なパッチリした目を音で書き、色をずらしてグリッチ（デジタルエラー）をかけました。

周波数（音のピッチ=色）がずれている画面上の色と輪郭について、音の質を探求しています。

（山根明季子）

4. 富田正之介 / Masanosuke Tomita

《一つ、またひとつ / *One after another*》(2020、公募入選作品・初演)

聴き方によって、音楽の印象が変わることがある。そのことを興味深いと思うようになってから、私は、音楽の聴取に関心を持っている。とりわけ、私の関心は、聴き手の分節の仕方にある。

この作品での私の試みは、聴き手の分節が一義的ではなく多義的であり得るようにすること、であった。実際の作業は、用いる要素やその取扱い方を限定し、一つのまとまりとして聴覚的に分節し得る箇所を不明確にすることであった。それは、この作品の佇まいにあらわれているだろう。とりわけ、一方が四分音低く調律された二台のピアノが齎す音程や響きの差異は、重要な役割を担っている。

この作品を聴くとき、聴き手は、ある種の混乱に陥るかもしれない。この作品では、ほとんど同じことが延々と続くだけで、何も起こらない。しかし、微かに異なる何かを捉えたとき、聴き手は、その知覚と記憶や忘却に基づいて、この作品に形を与え始めるだろう。聴き手は、すべての音を知覚することができず、また、知覚した音のすべてを記憶することも忘却することもできないが、それゆえに、この作品に与えられる形は、さまざまなものであり得る。（富田正之介）

5. 渡部瑞基 / Mizuki Watanebe

《コントラプンクト / Kotrapunkt》(2020、公募入選作品・初演)

この作品は静かな空間において沈黙や間、一つ一つの弱音に対しひたすらに耳を傾けたいという思いから生まれた。

作品自体はギヨーム・ド・マシヨのノートルダム・ミサ曲からキリエIを素材として引用し、それをマシヨの没年月日の数で音高と音価を歪ませるように作曲した。線の書法による音楽ではあるが、実際には点、それらの総合的な響きとして認識され、聴かれるであろう。

また視覚的な要素として2人の奏者の4つの手を4声の各声部にそのまま置き換えているため、その時間が静止したような音の世界とは裏腹に、2台のピアノ間を2人の奏者が絡みつきながら行き交う超絶技巧的な動きが要求されている。

個人的なことであるが、願わくばこの作品は夜、眠る直前に睡眠導入(曲)?として微睡みながら聴かれることを望む。(渡部瑞基)

6. 夏田昌和 / Masakazu Natsuda

《4分音を伴う3和音のためのエチュード / Étude pour les accords de trois notes avec quart de ton》

(2021、両国アートフェスティバル 2020 委嘱作品・初演)

クラシック音楽は勿論のことジャズや様々なポピュラー音楽でもワールドワイドに用いられている「3和音」は、その名の通り3つの構成音より成っており、短3度(半音3つ=6/4音)と長3度(半音4つ=8/4音)の組み合わせ方によって、長3和音(長3度+短3度)、短3和音(短3度+長3度)、増3和音(長3度×2)、減3和音(短3度×2)の4種類が存在する。4分音を用いた中3度(7/4音)や微増3度(9/4音)という音程をここに加えると、中3和音(中3度×2)や、微増3和音(長3度と中3度の組み合わせ)2種、微減3和音(短3度と中3度の組み合わせ)2種、短3微増3和音(短3度と微増3度の組み合わせ)の、6種類が新たに生まれることになる。(微減3度=5/4音はむしろ微増2度として知覚されるために除外した。)

この楽曲(題名はドビュッシーの《和音のためのエチュード》に由来する)は、これら計10種類の和音を3つの形(基本形、第1転回形、第2転回形)と様々な配置(密集配置、開離配置…etc.)で用いた作曲上のエチュードである。奏者2人は多くの場合2人で1つの和音を奏さなければならないため、常にぴったりと寄り添いシンクロする妙技が求められる。故にこれは本質的にホモフォニックな音楽である。また僅かな旋律的要素としては、同音反復の他、1/4分音や半音、3/4音で漸次下降してくる動きを中心としている。

初演して下さるお二人と、このような作曲機会を与えて下さった両国門天ホールに心より御礼申し上げます。(夏田昌和)

7. 渋谷由香 / Yuka Shibuya

《ファウンド・モーメント / Found Moment》(2021、両国アートフェスティバル 2020 委嘱作品・初演)

この曲は、以前作曲したピアノ曲で用いたコンセプト-とてつもなく長い時間であり、同時にただ一瞬でもあるような時間について-の延長線上にある。実際には、短いフレーズの断片をいくつかのパターンに分けて準備し並置していく。さらにこれらのフレーズが、ほとんどの場合反転し、そして反復していくという方法をとっている。また、4分音違いに調律された2台のピアノは、全体にわたってほぼリズムがユニゾンで演奏される。調律の違う2台が対峙することなく、ひとつの楽器として新しい景色が広がる事を望んで作曲した。最後に、この曲を作曲するにあたって、C.アイブズが4分音について書いている文章“Some “Quarter-tone” Impressions”と、そしてF.シューベルトの“Moments musicaux”やその他晩年の作品から大きな示唆を受けたということも付け加えておきたい。(渋谷由香)

8. キムヨハン / Yohan Kim

《空間と空間の間の空間 / A room between the rooms》(2020、公募入選作品・初演)

本作品は、音と音の間、楽器と楽器の間、更には空間と空間の間で、音の「空間性」を知覚するための試みである。音は、物理的振動によって感知されるものだが、それぞれの聴き方によって知覚される(頭の中で再現される)ものでもあるが故に、音の「空間性」という言説も時代と共に変わっていく。したがって「空間性」の知覚にも多様なアプローチが可能と言えよう。西洋芸術音楽に限って考えてみてもその試みは多く見られ、例えば音程(インターバル)とピッチ空間、強弱による距離感、オーケストラレーションによる奥行き、楽器の空間配置として表現され得る。しかし、本作品はそれらのパラメーターの操作によって知覚されるものだけでなく、時間を制圧する機械としての音(音たち)を「空間」として捉える。作品の中に現れる歪なプロポーションとプロセスは、音を進むものから滞在するものに置き換える。言い換えれば、各セクションの動きや変化に注目するよりは、場面ごと音と音の「前後と上下」関係に注目することである。その時、聴こえる音楽(音一音)は、無数の関係と関係の中で知覚され得るもう一つの空間に他ならない。(キムヨハン)

出演者プロフィール

夏田昌和 なつだまさかず●芸術監督・作曲

1968年東京生まれ。東京芸術大学大学院修了後、渡仏。パリ国立高等音楽院にて作曲と指揮を学び、審査員全員一致の首席一等賞を得て同院作曲科を卒業。作曲を野田暉行、永富正之、近藤謙、Gérard Grisey、指揮を秋山和慶、Jean-Sébastien Béreau、伴奏法をHenriette Puig=Rogetの各氏に師事。芥川作曲賞や出光音楽賞をはじめとする受賞や入賞、入選多数。フランス文化省やサントリー音楽財団、アンサンブル・アンテルコンタンポランを始めとする数多くの公的機関や演奏団体、ソリストより委嘱を受けて書かれた作品は、世界各地の様々な音楽祭や演奏会にて紹介されている。指揮者としては邦人作品の初演や海外現代作品の紹介に数多く携わり、グリゼイの《Vortex Temporum》や《境界を越えるための4つの歌》の日本初演も指揮した。指揮者の阿部加奈子と共に日仏現代音楽協会を設立して初代事務局長を務め、その後も同協会を通じて様々な教育プログラムや演奏会・シンポジウム等の企画・運営に携わっている。2013年に東京オペラシティ・リサイタルホールにて大規模な室内楽個展が開催された他、ジバング・プロダクツよりCD「先史時代の歌～夏田昌和作品集」をリリース。

<https://www.artandmedia.com/artists/masakazu-natsuda/>

Masakazu Natsuda

Born in Tokyo in 1968. Masakazu NATSUDA studied composition with Masayuki Nagatomi, Teruyuki Noda and Jo Kondo at the faculty and the postgraduate course of the Tokyo University of the Arts. Later he studied composition with Gérard Grisey and conducting with Jean-Sébastien Béreau at the Conservatory of Paris where he won "le Premier Prix à l'Unanimité" of composition with top honors. He has received many national and international awards both in composition and in conducting, including the Idemitsu Music Prize and the Akutagawa Composition Prize. He has been commissioned to compose works for the Ensemble InterContemporain, the French Ministry of Culture, the Suntory Music Foundation and other institutions. His music is widely performed in Asia, Europe and North America by notable orchestras, ensembles and soloists. Natsuda also contributes to presenting many contemporary works by conducting various ensembles in Japan. In 2013, he established the Japan-France Association for Contemporary Music with conductor Kanako Abe.

及川夕美 おいかわゆみ●ピアノ

東京藝術大学附属高校及び同大学器楽科を卒業。在学中より現代作品の演奏活動を開始し、多くの新作初演に携わる。97年、日本現代音楽協会主催演奏コンクール「競奏」で第3位入賞。アンサンブルコンテンポラリーα、アンサンブル東風のメンバーとしてアジア作曲家連盟音楽祭、大邱国際現代音楽祭、統営音楽祭、女性作曲家連盟音楽祭、日本ミャンマー交流演奏会、オランダガウデアムス現代音楽週間など国内外の多くの音楽祭及び演奏会に出演、アジアを中心とした活動を行なっている。ソウルの秋溪藝術大学でページのプリパレーションについてのレクチャーを行う他、一昨年5月には浙江省の紹興文理学院からの招聘で演奏会を行った。東京成徳短期大学非常勤講師。

Yumi Oikawa

Graduated from the attached high school, and instrumental course of the Tokyo University of the Arts. She started her professional career in performing contemporary music when she was in university, participating in many premieres. In 1997, she won the 3rd prize of Kyogaku (music-competition) of Japan Society of Contemporary Music. As a member of Ensemble Kochi (East Wind) and Ensemble Contemporary Alpha, she is specially in active in Asia, being appeared on concerts and festivals such as the Asian Composers League Festival, the Daegu International Festival for Contemporary Music, the Seoul Woman Composers league, the Japan-Myanmar Exchange Concert, and the Gow de Amstel International Contemporary Music Festival. She gave a lecture on piano preparation for the music of John Cage at the Chugye University for the Arts, while gave a concert under the invitation of Shaoxing University, Zhejiang in last May. A lecturer of Tokyo Seitoku College.

大須賀かおり おおすがかおり●ピアノ

桐朋学園大学音楽演奏学科卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。日本室内楽コンクール第2位。現代音楽演奏コンクール競奏V優勝、第12回朝日現代音楽賞、2003年度青山バロックザール賞受賞。ソロリサイタルやオーケストラとの共演。多くの作曲家の作品初演やCD録音に携わり、これまでの初演数は300曲を超える。ジバングレーベルより4枚のアルバムと楽譜集をリリース。2020年コジマ録音からリリースしたアイヴズのソナタ全集が第75回文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞。日仏現代音楽協会、日本・フィンランド新音楽協会会員。<http://kaoriohsuga.com/>

Kaori Ohsuga

Pianist Kaori Ohsuga studied at Toho Gaken College Music Department and completed the ensemble diploma course. She won the Second Prize of the 9th Competition of Japan Chamber Music. In 2001, She formed the piano-violin duo "ROSCO" and won the First Prize at the "Kyogaku V" of the 5th Contemporary Music Performance Competition and received the 12th Asahi Contemporary Music Award at the same time. In 2003, she received the Aoyama Baroquesaar Award of the Music Performance Competition founded. Koari Ohsuga has premiered more than 300 contemporary works. Member of Association FRANCO-JAPONAISE de la Musique Contemporaine, and Japan-Finland Contemporary Music Society. Lecturer of Toho Gakuen college of drama and music, Tokyo Seitoku college and Yaei highschool music department.

渋谷由香 しぶやゆか●作曲

1981年京都生まれ。東京藝術大学、同大学院で作曲を学び同大学院博士後期課程修了、博士号取得。第19回京都芸術祭新人賞、第28回現代音作曲新人賞入選、富樫賞、聴衆賞受賞。武生国際音楽祭(福井)、Quatour Bozziniとの日加交換プロジェクト(東京⇄モントリオール)、Thin Edge New Music Collective 2019season concert(トロント)、Music From Japan(NY)などに参加。個々の音や音同士の関係性によって象られていくような時間のあり方について探究した作品が多く、特に近年は非平均律による微分音程を用いた作品を多く作曲。東京藝術大学、東京大学、東京藝術大学音楽学部付属音楽高等学校各非常勤講師。

Yuka Shibuya

Yuka Shibuya was born in Kyoto in 1981, and graduated from the composition department of Tokyo University of the Arts in 2012. Her doctoral work focused on microtonal intervals derived from unequal temperament and the use of microtonal intervals as musical resources. In recent years, she has been interested in exploring the relationships between individual tones, and writing many pieces utilising microtonal intervals and unequal temperament. She is lecturer at Tokyo University of the Arts, and Tokyo University.

山根明季子 やまねあきこ●作曲

1982年大阪生まれ。京都市立芸術大学修了。西洋の器楽から、声、雅楽、邦楽器のための作曲のほか各種メディアによる作品制作を通じて、音の質の微細な違い、知覚の個人性と多様性にテーマに活動。日本を拠点に現代社会における過剰な消費や幼児性などを凝視め、状態や空間の質を身体的な皮膚感覚を通して音に落とし込むことで創作を行う。これまでにサントリーホールサマーフェスティバル、武生国際音楽祭、秋吉台の夏、アルスムジカ、ワルシャワの秋などで作品上演。日本音楽コンクール第1位、芥川作曲賞など受賞。作曲の他、持続音によるソーシャルインスタレーション、アミューズメント空間のフィールドレコーディング活動も行っている。

Akiko Yamane

Akiko Yamane graduated from Kyoto City University of Arts. Based in Japan, she explores over-consumption and infantile nature of modern society, and transforms the qualities of these conditions and spaces into a single sound, or a sustained sound, through the physical sensation of the skin, in a style of creation. Her works have been performed and featured by the Suntory Hall Summer Festival, Takefu International Music Festival, Ars Musica, Warsaw Autumn, and others. In addition to composing, she supervised the performance of Tokyo Gen'On Project #10 on the theme of consumer society. She is also involved in artistic installations using drones and field recordings from amusement spaces such as arcades and pachinko parlors.

キムヨハン きむよはん●作曲

1989年韓国ソウル生まれ、20才の時から作曲家を志し、22才に渡日して現在は国立音楽大学大学院音楽研究科博士後期課程に在学中。修士課程ではドイツの作曲家マティアス・シュパーリングの音楽における形式構造をテーマに論文を執筆、博士課程でも同じテーマで研究を続けている。

<https://www.youtube.com/user/Nosusdecipiosound/>

Yohan Kim

Born in Seoul, Yo-Han Kim came to Japan in 2011 wishing to be a composer. He is currently a graduate student in the doctoral course at the Kunitachi College of Music, majoring in Composition.

富田正之介 とみたまきのすけ●作曲

昭和音楽大学作曲学科作曲コース卒業。その後、近藤譲、森下周子、渡辺裕紀子の各氏に作曲を師事。近年の作品には、*Palais de Marimba for two marimbas*、*One After Another for two pianos (one tuned a quarter-tone lower)*、*Nothing Happens for string quartet* 等がある。

Masanosuke Tomita

Masanosuke Tomita, born in 1993, is a Japanese composer who explores listening experience. His recent works have focused on creating mostly just the same thing that goes on and on.

渡部瑞基 わたなべみずき●作曲

2000年福島生まれ。作曲を嶋津武仁、横島浩の両氏、ピアノを降矢美彌子氏に師事。作品はニューヨーク・フィルハーモニックや仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバーなどにより演奏される。第2回SISU100現代音楽セミナーに受講生として参加、ピアノソロ作品が主催公演公募作品として選ばれ北海道にて初演予定。現在、福島大学2年在学中。

Mizuki Watanabe

Born in Fukushima in 2000. Studied composition under Takehito Shimazu and Hiroshi Yokoshima, and piano under Miyako Furiya. Some of the works was performed by members of the New York Philharmonic and the Sendai Philharmonic Orchestra. Participated in the 2nd SISU100 Contemporary Music Seminar as a student, and the piano solo work was selected as a public offering work and it will be premiered in Hokkaido. Currently in the second year of Fukushima University.

映像配信：桑田和典

音響：五十嵐優

主催：一般社団法人もんでん

後援：日仏現代音楽協会

協力：ナヤ・コレクティブ

助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、芸術文化振興基金助成事業、
公益財団法人朝日新聞文化財団



第6回両国アートフェスティバル2020 プログラムⅢ 配布プログラム

2021年3月20日発行

編集・発行元 一般社団法人もんでん

禁転載